

### 「学校長表彰」

2026・6・10 重枝 一郎

今の生徒たち（10代から20代後半）を指す言葉として、「Z世代」という言葉がある。この世代は、「コスパ・タイパ主義」「チャレンジしない」などと世間から評される。私の実感としても、生徒に関わる中で感じるのは、思春期のあたりまえ以上に「人の目をとてても気にする」ということはある。また、そういう自身の状況に疑問を感じていなくて、自分の意見をもたないのが正しい選択と思い込んでいる感じもする。例えば、ある生徒に何か聞くと、すぐに答えず、横の友だちと必ず顔を見合わせる。保護者と生徒と面談する時も同様である。おそらく、周りとは違った意見は言いたくない、目立ちたくないと思っているからだろう。私などは、このような態度であると、ムカッときてしまう質である（笑）。ただ、こういった態度の背景を知っているから我慢はできる（笑）。

こうした特徴の形成には、教育の影響はかなり大きい。生徒たちの多くは、幼少の頃から、「良い子＝何もしない手のかからない子」でいるように言い聞かされている。受け身がしみ込み、何か良いことをするというより、「何も悪いことはしないのが良い子」と教育されている。そうすると、生徒は、失敗さえしなければというマインドになる。だから「良いこと」もチャレンジもしない。これは、社会の変化に適応した結果と考えることができる。失敗が許されない社会の空気に敏感に反応し、若いゆえに素直に感染している。また、傷付きやすいメンタル面も社会環境がそうさせている面が大きい。

それはどういった社会環境かという点、「お客様扱いをする・される」ことである。ビジネスと直結する現代社会では、サービス業に限らず、学校でもお客様のように扱われる。だから叱られることがなくなる。だが叱る場面は当然出てくる。ただ、叱られ慣れない生徒は、叱られるということは、相当ヤバいことをやったという考えになり、ちょっと叱られたら、それは大きな失敗と学習する。そのため、生徒はとにかく失敗しないように振舞うようになる。

10数年前くらいだろうか、中高では「いじめアンケート」を定期的にするようになったと思う。その回数は年に2回程度から、毎学期、今は毎月実施しているところもあると聞く。私は、このアリバイ作りが正直好きではない。先生方のように生徒の一瞬の様相に感度を高く持ちながら接していくことが一番重要だと思う。そして、負の感情に支配される「いじめアンケート」の回数を増やして実施するなら、プラスの感情を生む「いいところ探し」も同じ量することが大切だと思っている。そうでないと、上に書いたように、何もしないことがいいことという生徒をただ増やしていく気がする。そんな感度があるから、私は「学校長表彰」をしている。少しでも、生徒が自分から行動を起こすことへの不安感を少なくしたい。一番効果的なのは、日常の教師の語りである。これが学校の空気をつくる。この空気が教育力になる。例えば、こんな語りはどうだろう。

『確かに新しいことにチャレンジする時には不安はある。でもその不安に何か明確な根拠はあるのかと言いたい。おそらく明確な根拠とは言えないはずである。行動しないことを行動できないことに転嫁するための言い訳にしている。理詰めで動いていると思われるビジネスの社会でも、時に厳密な因果関係がなくても、“やってみるか”という何となくの納得感で行動し、苦難を乗り越えることも多いという。ならば、逆に自信を持つにも根拠はいらない。もちろん見通しをもつことも大事だが、何事においても、まずは一步を踏み出すことが肝要である。行動しなければ何も始まらない。その結果がどうだったかで、次の行動を決めていくだけ。みんなには、この根拠のない自信をもってほしい。不安に思っただけで何もしないより、根拠のない自信をもってチャレンジする方がいい。』

先生がいつも言っているだろ。“さっさとやって、サッサと失敗して、さっさともう1回やるのが成功の秘訣”って』

【学校長表彰】

2021 年度より学校外での善行者を表彰している。昨年度は7名を校長室で表彰させてもらった。都度、HPで紹介している。

※昨年度は高齢者への親切，地域のボランティア等。

本年度の1人目で，高校3年3組の大原陽奈璃さんを6月4日に「学校長表彰」をしました。

大原さんは，登校中の電車の中で，立っていたお母さんとそのお子さんに対し，声をかけ，席を譲ったそうです。そのお母さんから学校に「素晴らしい心遣いに感動しました」との連絡が入りました。